

「個人主義」の呪縛から脱出せよ

柳父章氏の『翻訳語成立事情』は小著ながら庄巻である。そこには、個人、社会、近代、自由等々の西洋起源の観念をいかにして日本語に移し替えるかに試行錯誤を重ねた福澤諭吉や中村正直など、往時の知識人の苦闘が鮮やかに描き出されている。

日本には存在しなかった観念

インディビデュアル(individual)は現在ではごく普通に「個人」として使われているが、この言葉が導入された頃の日本にはそういう観念は存在しなかった。神や社会に対する究極的な単位として、それ以上は細分化できない唯一の存在といった意味での個人が、かつての日本になかったことは柳父氏のいう通りであろう。当時、日本人は社会の「身分」として存在はしていても、個人としてではなかった。

いま社会といったが、これも後世の造語だという。今日使われているようなソサイエティ(society)の訳語である「社会」に対応する現実の往時の日本にはなかった。存在したのは家とか藩

とか邦といった集団における身分であった。個人を構成単位とする人間関係を社会だとする考えは、柳父氏によれば、むしろこの訳語が成立して以降のことらしい。

個人についていえば、福澤がまずは「人」、次いで「独一人」と訳し、その後、独が落ちて「一人」、さらに一が落ちて「個人」になったと柳父氏は追跡する。また社会については、中村正直が同じ目的をもった人々の集まりという意味をこめて「会社」と訳したという。実際、福澤、中村ら当時の代表的知識人が集った西洋思想啓蒙の場が明六「社」であった。そういう社の集まりが「会」であり、社会となったというのが柳父氏の究明である。

個人は身分に、社会は世間に対応されて、それぞれ前者の方が後者よりも高い価値をもつ観念であるかのように受け取られてきた。個人や社会という現実の有無にか

正論



拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫

かわらず、その言葉自体が自己運動を展開してきたと柳父氏は主張したかったのであろう。

組上に載せるべき13条と24条

言葉が「人間の道具」として使われるに、何らかの意味でことばが人間を支配している」と氏はいう。

「個人主義」や「社会主義」ともなれば、これはもう思考の専制と支配そのものだというべきであろう。社会主義の方は冷戦崩壊とともに人々を惹きつける魅力はすっ

は「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立」とある。第13条は個人至上主義そのものであり、第24条は独立した個人から構成されるものが夫婦であるというのみ、これが共同体の基層をなす家族の形成主体だという観念を少しも呼び覚ましてはくれない。

2006年には単身世帯数が標準世帯(夫婦と子供から成る)数を上回って最大の世帯類型となった。日本の人口史上初の事態である。10年の全世帯数に占める単身世帯数の比率は31%、30年には40%に迫ろうと推計されている。非婚、離婚、子供をもたない夫婦が増え、人口再生産のメカニズムが毀損されつつある。独居高齢世帯の急増は少子高齢時代における社会保障の安定性維持が難事であることを証している。

結婚、出産、育児といったライフサイクルをどう形づくるかは個人の自由な選択によるべきだという規範意識が第24条の背後には潜む。個人至上主義を克服して家族再生のための憲法上の担保がなされなければ、民法をはじめとする下位法の改正や政策は後手に回ら

ざるをえまい。

国家の命運は家族の再生だ

私は奉職する大学の日本近代史講義の冒頭でこう説く。現世の自己の存在のみがすべてだなどと考へるのは不道徳である。諸君には父母がおり、祖父母、曾祖父母、祖先がある。数世代を遡るだけでゆづりに百人を超える血族があり、その内の一人が欠けても諸君はここには存在していないのだ。諸君のもつさまざまな属性は遺伝子の情報伝達メカニズムを通じて血族から諸君に移し替えられている。それゆえ個人はすべて歴史的存在なのだ。現世の個人は連綿とつづく血縁の中の一人の旅人である。死せる者のいうことにも耳を傾けながら現世を選び取るという感覚を呼び起こそうではないか。

日本という国家の命運は、外敵からいかに身を守るかにかかっていると同時に、共同体の基層にある家族の再生をいかにして図るかにも委ねられている。国人よ、まだ遅くはない、個人主義の呪縛から脱しようではないか。

(わたなべ としお)